

石神遺跡（第19・20次） の調査

— 第145・150次

はじめに

1981年以降の継続調査を通じて、石神遺跡の中核部は主に7世紀の建物や広場・井戸・溝などが配置され、遺構は大きく3時期の変遷があることが明らかになっている。A期（7世紀前半～中葉）は、方形区画内部に大規模な長廊状建物や四面庇建物、井戸や石組溝を計画的に配置し、饗宴施設と考えられている。B期（7世紀後半）になると大規模な改変があり、南北堀や掘立柱建物が散在する状況を示すようになる。C期（藤原宮期）には再び建物の配置を変え、方形区画内に建物群を建てる。B・C期は官衙の可能性が指摘されている。

第15次調査以降は、石神遺跡の範囲確定のために、中核施設群以北の土地利用の解明および遺跡の北方に想定される阿倍山田道の検出などを目的として調査をおこなっている。

第19次調査

第19次調査では、第18次調査区の北側隣接地を対象とした。調査面積は870㎡、調査期間は2006年10月23日～2007年5月29日である。調査体制は2班引き継ぎでおこなった。

基本層序は上から順に、水田耕土（25cm）、床土（5cm）、黄灰色土（20cm）、灰褐色土（20cm）で、それ以下が整地土および遺構である。さらに下層に暗灰色砂と灰色粗砂が堆積する。

1 検出遺構

検出した主な遺構は、道路・溝・沼沢地・堰状施設・杭列・礫集中である。これらの遺構は大きく5時期に分かれる。従来のA～C期区分との対応が困難なため、ここではI～V期に分けて記述する。

I期（7世紀中葉以前）

沼沢地SX4050 調査区の旧地形は東半が高く、西半は一段低くなる。低いところは沼沢地であり、流水による自然堆積を示す暗灰色粘土と砂が互層状に堆積し、その下には砂礫が広がる。暗灰色粘土層からはTK43型式の須

恵器が出土し、堆積進行中の年代を示す。

堰状施設SX4262 木材のほか木製臼や木製琴を転用し組み合わせた堰状施設。調査区南西のSX4050内にあり、堆積土により埋没する。

斜行溝SD4260 調査区東半の微高地の縁辺に沿って、北に向かってやや西に斜行する素掘溝。幅2.1～2.5m、深さ0.5mで、断面形態は逆台形を呈する。本調査では長さ11mを検出したが、調査区外の南北へと続くことを確認している。本溝は暗灰色粘土で0.3mほど埋め、ついで土器・木屑・瓦・木簡・るつば・羽口・糸巻未製品・漆容器蓋・動物骨・植物種子などを廃棄し（木屑層）、さらにその上を黒灰色粘土で埋める（図115）。木屑層の遺物は一括廃棄された可能性が高く、飛鳥Iの新しい段階の土器が出土している。

II期（7世紀中葉～7世紀後半）

SX4050・SD4260を埋め、道路SF2607・南北溝SD4090・東西溝SD4270をつくる。

杭列SX4263～4265 第18次調査で検出した杭列SX4230と一連のものである。方位が振れるのは、旧地形に沿っ

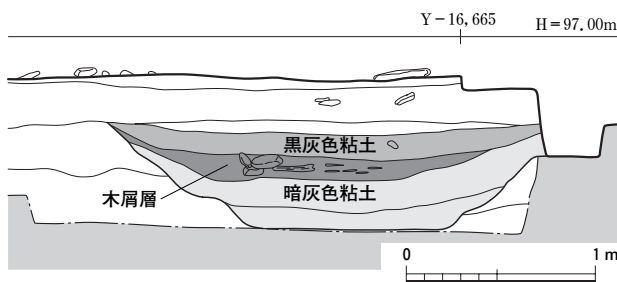


図115 SD4260断面図 1:40



図116 SD4260木屑層検出状況（北から）

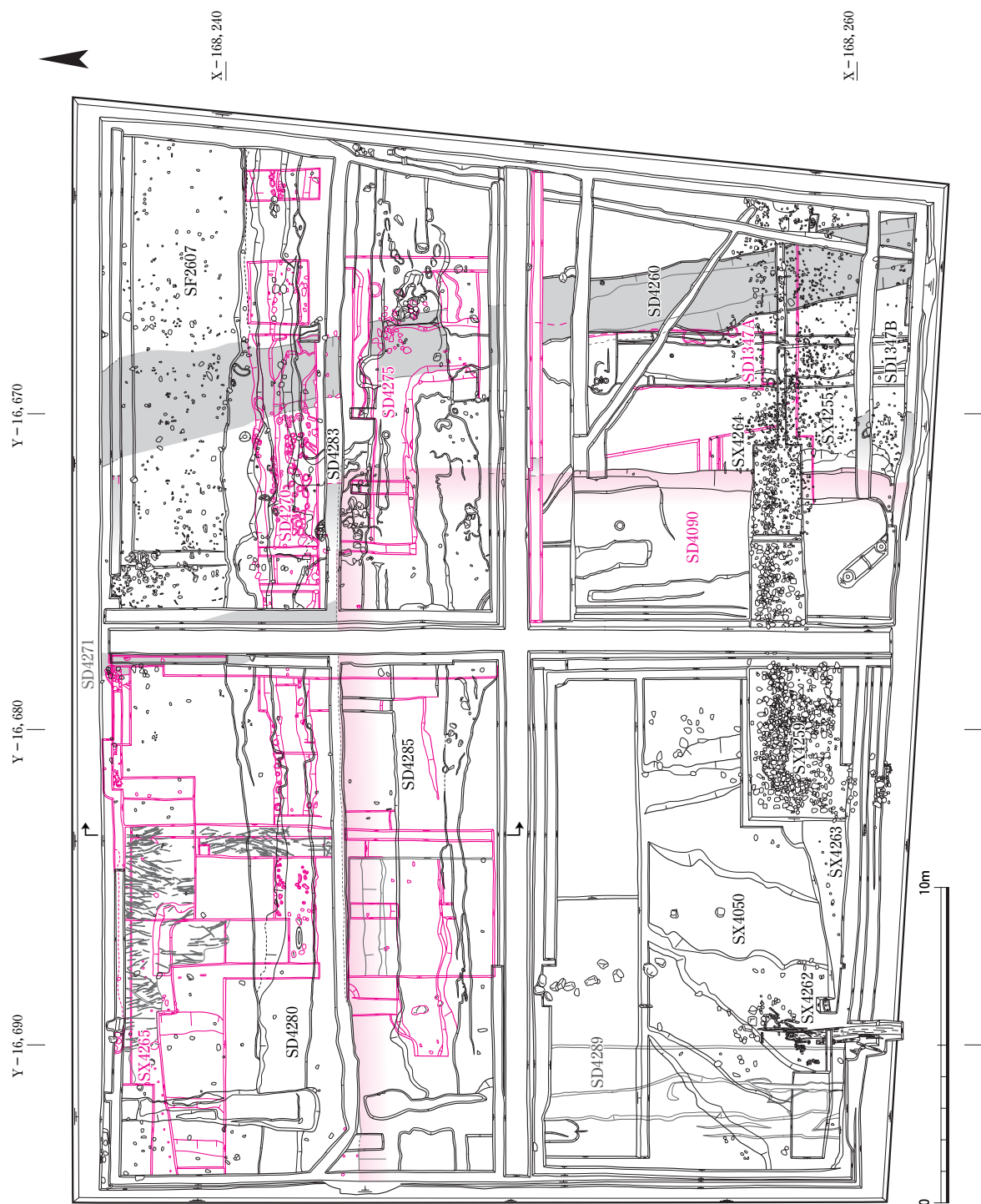


図117 第145次調査（石神第19次）調査遺構図 1：200

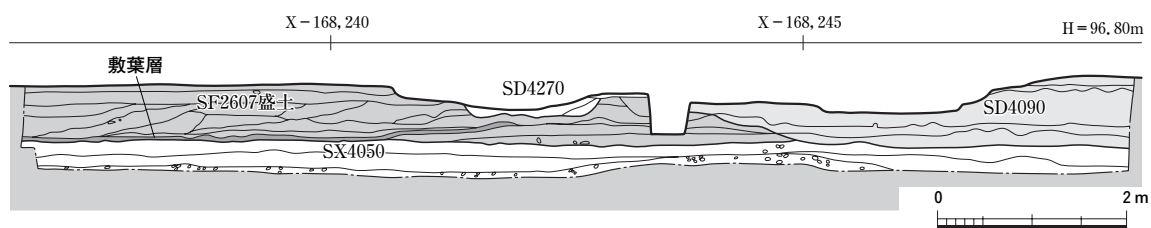


図118 SF2607断面図 1：80

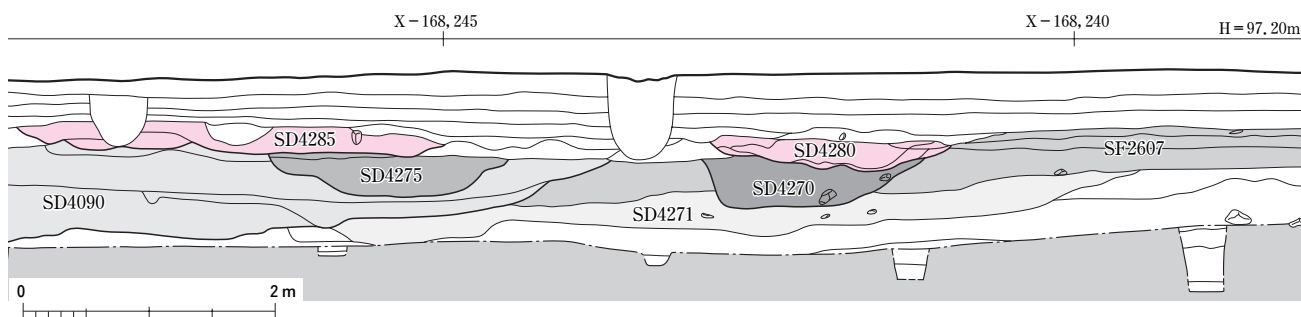


図119 中央壁北半断面図 1:60

て打たれたためと考えられる。杭はSX4050堆積層に打ち込まれ、南北22m、東西20m以上の方形区画をつくる。杭列を境にSX4050埋め立て土の状況が異なるため、埋め立て時の土留めの役割が想定できる。

斜行溝SD4271 北で西に振れる斜行溝。SX4050を埋めた土に掘り込み、道路SF2607の盛土に覆われている。正確な平面プランは確認できなかった。埋土はしまりのない黒色砂質土で、木屑・炭を多く含む。整地時の一時的な排水溝であろうか。

道路SF2607 盛土工法により構築された道路である。道路の構築は、①SX4050を埋め立てる、②地盤改良をおこなう、③砂質土を30～40cm積み上げる、④粘質土を10cmほど積み上げる、⑤木片や土器が混じる砂質土を積む、の順番でなされている(図118)。盛土に版築をおこなった形跡は認められない。

盛土に際しては、基礎部分に「敷葉(敷粗朶)工法」が用いられている(巻頭図版4)。敷葉層は一層のみである。

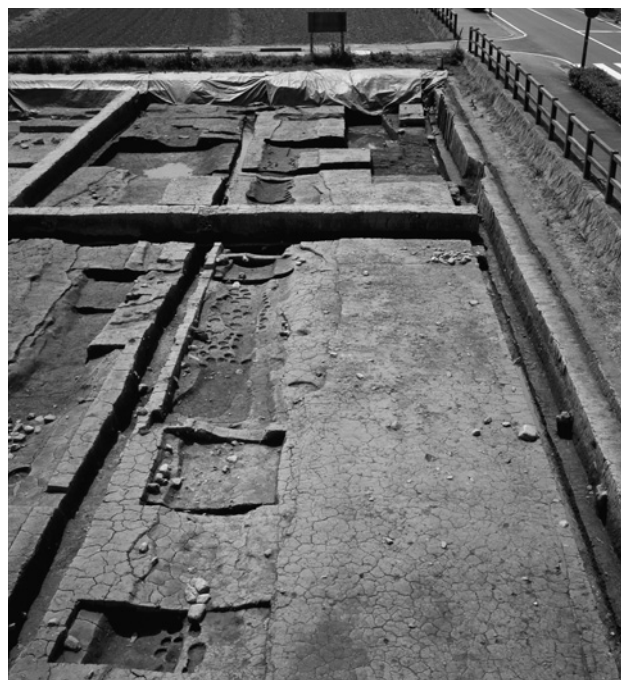


図120 SF2607検出状況(東から)

南北約7m、東西約14mの範囲において検出した。ツブラジイ・サカキ・シャシャンボなどの枝を葉がついたまま用いる。枝は南北に方向をそろえる。これらは、盛土基底部の全面には施工されておらず、水はけの悪い部分などに、必要に応じて敷いたものと考えられる。

路面は削平されていたが、一部3～5cm大の小礫が貼り付けられた部分があり、道路の補修などに関わる可能性がある。なお、本道路は後述のSD4090の北岸になり、堤の機能も果たしている。

東西溝SD4270 SF2607の南側溝である。SF2607の盛土構築後に掘り込んでいる。側面と底で石の抜けた痕跡を検出し、石組溝であった可能性が高い。幅1.3～1.8m、深さ0.2～0.4mで、長さ約26m分を検出した。暗黄灰色砂質土で埋め立てられている。

南北溝SD4090 第15次調査区から北流する大溝である。幅は22m以上で、深さは0.5m。東岸は直線的である。SF2607が北岸となり、西岸は調査区内では検出できなかったことから、本調査区から西へ曲がって東西溝になると考えられる。石による護岸などはない。黒色砂質土や灰色粗砂が堆積し、青灰色砂質土・褐色砂質土・礫で埋められている。既往の調査と同様、土器・木簡・木器が比較的多く出土している。なお、SF2607との間を遮蔽する施設は確認できなかった。

Ⅲ期(7世紀後半)

SD4270とSD4090を埋め、東西溝SD4275と南北溝SD1347Aを掘る。SD4275とSD1347AはT字状に接続する。

南北溝SD1347A 調査区東半の南北溝。石神遺跡C期を南北に貫く基幹排水路である。石による護岸などは見つからなかった。Ⅳ期のSD1347Bと重複するため残りが悪く、出土遺物も少ない。幅1.8～2m、深さ0.2m。なお、第16・18次調査で検出したSD1347Aに先行する南北溝SD4127は確認できなかった。

東西溝SD4275 Ⅱ期のSD4270から3～3.5m南に位置する素掘溝。Ⅲ期のSF2607南側溝である。埋土は炭混じり

の黒色粘質土。出土遺物は少ない。ただし溝の周辺からは、埋め立てに伴う一連の整地土（暗灰褐色粘質土）より木簡1点が出土している。幅1.5～2.2m、深さ0.3m。

Ⅳ期（藤原宮期）

SD1347AとSD4275を埋め、南北溝SD1347B、東西溝SD4280・4285を掘る。3条の溝の配置は干状になる。

南北溝SD1347B SD1347Aを埋めた後、ほぼ同じ位置に掘り直した溝。幅1.2m前後、深さ0.2m。長さ15m分を検出した。灰色粗砂で埋まる。

東西溝SD4285 SD4275を埋め、やや南に位置をずらして掘った溝。SD1347BとT字状に接続する。SD1347Bとの合流点以東では幅1.3～1.7m、深さ0.1～0.2m、合流点以西では幅2.3～3.3m、深さ0.2mを測る。長さ33m分を検出した。埋土は灰色粗砂。

東西溝SD4280 SD4285から北へ約4.6mに位置する。幅1.3～2.5m、深さ0.2m。長さ33m分を検出した。SD4285との先後関係は不明であるが、埋土が同じ灰色粗砂で埋まること、両溝出土土器が接合すること、両溝をつなぐSD4283の存在から、少なくとも最終段階では併存していた可能性が高い。灰色粗砂層からは飛鳥Vの土器が多く出土した。

この時期のSF2607の北側溝は、山田道第2・3次調査（『藤原概報21』）で検出した7世紀末～8世紀前半の土器を含む東西溝SD2540であり、SD4280を南側溝とみると路面幅約18m、溝心々間距離で21～22mとなる。

斜行溝SD4283 東西溝SD4280・4285間をつなぐ斜行溝。人為的なものか、両溝間が浸食により崩壊したものかは不明である。幅3.6m、深さ0.1m。

Ⅴ期（奈良時代以降～中世）

南北溝SD4289 調査区西側で検出した素掘溝。SF2607上に掘られ、調査区よりもさらに北へ延びる。調査区西でとぎれる部分があるが、元々は同じ溝であったと考える。遺物量は少ないが、木簡や墨書のある檜扇が出土した。幅0.5～1.3m、深さ0.2～0.4mである。

礫敷SX4255 第15次調査区から続く。5cm前後の小礫が中心。

礫敷SX4259 第18次調査区から続き、逆L字状に東へ折れる。人頭大の大礫が集中し、SX4255の上を覆う。礫に接して瓦器が出土したことから、平安時代以降の遺構と考えられる。

2 出土遺物

土 器

土器は整理箱で120箱分出土した。大半は須恵器・土師器であり、製塩土器・瓦器・近世陶磁器が少量ある。7世紀中葉および7世紀後半から8世紀初めまでの土器が多い。以下、飛鳥Iの良好な一括資料であるI期の斜行溝SD4260出土土器を中心に報告する。

SD4260出土土器 木屑層から多量の土師器・須恵器が出土した。土師器の器種には杯C、杯G、杯H、台付杯、高杯C、高杯G、蓋、鉢A、盤、甕がある。（図121）

杯C（3～10）は径高指数が34～39.6で、平均36.7である。口径は9.0～17.8cmであり、法量によりⅠ～Ⅲに大別されるが、ⅠとⅢが量的に多く、Ⅱは少ない。杯CⅠはすべて外面をヘラ削りする。その後、ヘラミガキをおこなうもの（3～5）と、省略するもの（6）がある。5の底部には穿孔がある。杯CⅢの外面調整は、ヘラ削りの後ヘラミガキをするもの（7、8）とナデ調整のみのもの（9、10）がある。

杯G（11～15）は口径10.2～12.2cmで小型のものが多く、口縁端部に平坦面をもつもの（11、15）、凹線状の段をもつもの（12、13）、丸くおさめるもの（14）がある。

杯H（16～20）は、杯Gと同じく小型のものが多く、口径10.4～10.6cm（16～18）と12.3～12.6cm（19、20）の2つに分かれる。また、口縁部を強くヨコナデして底部との間に明瞭な稜をもつもの（16、20）、もたないもの（17～19）の2つに分かれる。

蓋（1）は杯Cを逆にした形態である。頂部が平坦な高いつまみがつく。台付杯（2）は須恵器短脚高杯に似た珍しい形態である。内面に放射暗文を施し、外面にヘラミガキを施す。高杯にはC（22、24）、G（23、25）がある。22は幅2mmの太い暗文を施す。鉢A（21）は口径26.4cm、外面は底部をヘラ削りした後に、粗くヘラミガキを施す。26は小型の甕で、口径11.0cm。外面をヘラ削りし、内面はナデ調整である。甕C（27）は、外面にヘラ描きがある。口縁端部を上方につまみ出し、外面ハケ調整、内面をヨコハケした後、下半部は縦にヘラ削りをおこなう。同型の甕Cが少なくとも3個体以上出土している。

須恵器の器種には、杯H、杯G、短脚高杯、長脚高杯、蓋、鉢、壺、甕がある。（図122）

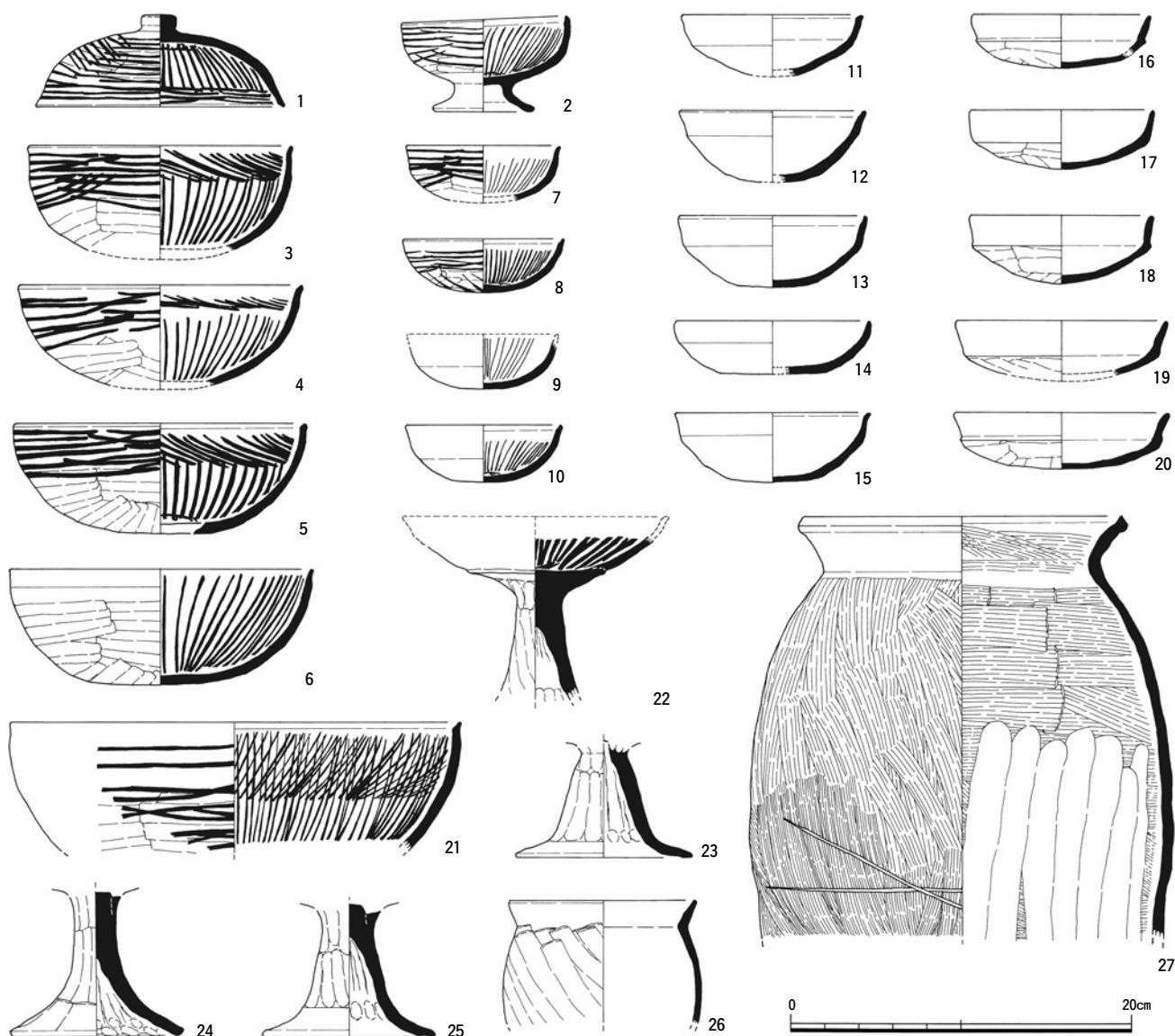


図121 SD4260出土土師器 1:4

杯H (28~32) は口径 (蓋の径あるいは蓋のあたる部分での身の口径) 10.4~12.2cmで、平均は11.5cmである。底部外面はヘラ切り未調整のものが多い。図示した個体にはいずれもヘラ記号がある。

杯G (33~41) は口径9.7~11.8cmで、平均は11.0cmである。蓋は口径が小さくかえりが口縁部よりも中に入るもの (33) と、口径が大きいかえりが口縁部より下に出るもの (34~37) があり、前者が新しい時期の特徴を示している。身の底部はロクロ削りするものが多いが、ヘラ切り未調整のもの (39) もある。

口縁部を外側に屈曲させる杯X (42) は数個体出土しているが、いずれも底部はヘラ切り未調整である。

43~46は短脚高杯である。44は内面に、45は外面にヘラ記号がある。長脚高杯 (47) は、外面全体と口縁部内面が黒色に燻されており、脚部4方向に円孔を穿つ。

48は蓋。口径16.6cmを計る。台付杯の蓋か。飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層に類例がある。小型鉢 (49) は口縁部が大きく外反し、内面には降灰が残る。同じ特徴をもった中・大型品 (口径約32cm、42cm) がそれぞれSD4260黒灰色粘土層と木屑層から出土している。50の鉢は、体部が浅く肩が張った器形で、外方へ広がる口縁部がつく。胎土や焼成の特徴から猿投窯で焼成された可能性が高い。甕 (51) は外面にカキメを施し、内面に当て具痕が残る。

このほか、被熱土器・漆附着土器・銅附着土器がある。

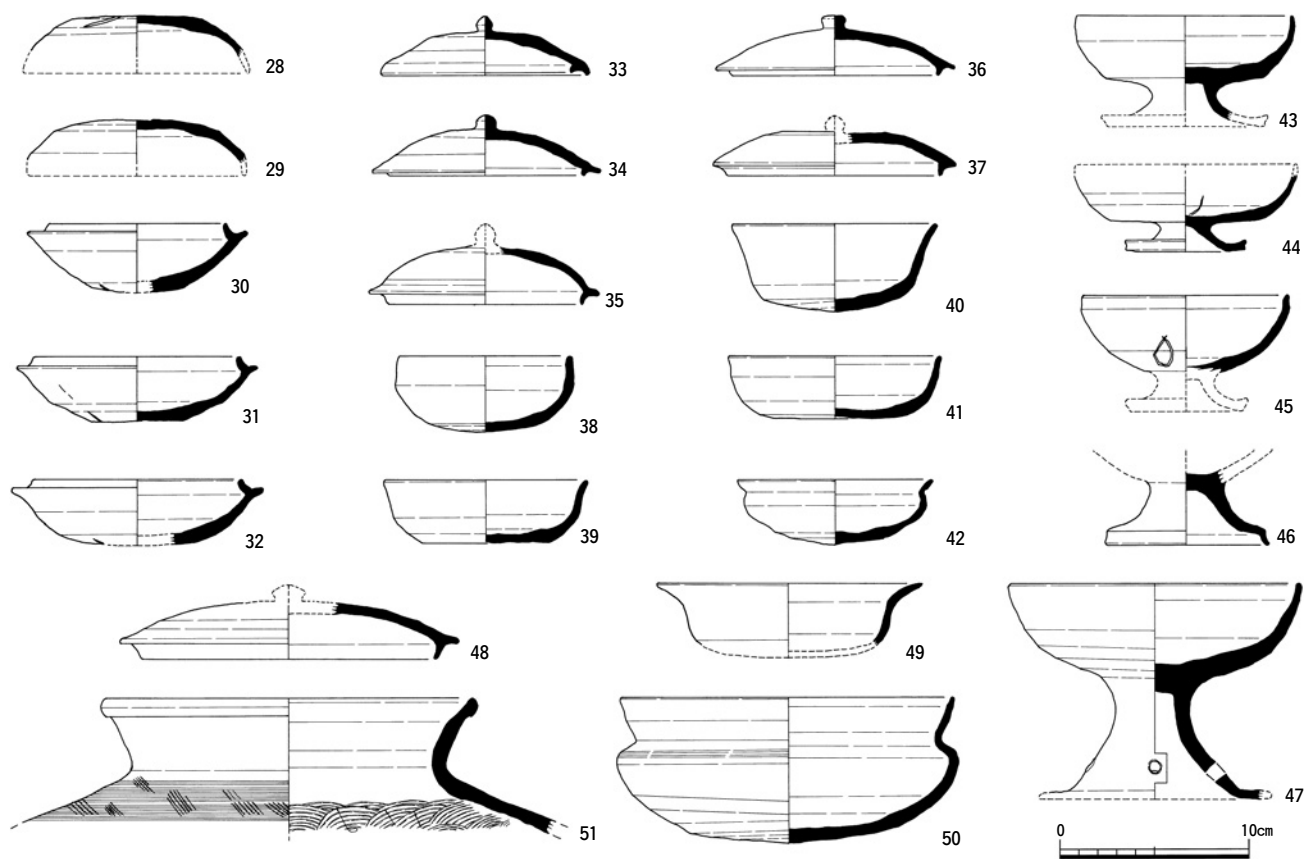


図122 SD4260出土須恵器 1:4

SX4050出土土器 52は沼沢地SX4050堆積土出土の須恵器杯H蓋。頂部にヘラ記号がある。口径15.2cm。TK43型式である。

SF2607に関わる土器 53は斜行溝SD4271から出土した須恵器杯H。口径10.6cm、立ち上がりの高さ1.1cmである。胎土・形態の特徴から猿投窯産であろう。54は道路SF2607敷葉層直下から出土した土師器高杯C。杯部がやや浅い特徴を示す。

以上の土器は、遺構の重複関係からSX4050→SD4260→SF2607の変遷が明らかであり、道路SF2607の造営時期の上限年代を考える上でも重要である。

SX4050出土土器から、6世紀後半頃には沼沢地SX4050の堆積が進行中であったことがわかる。

SD4260出土土器は、道路SF2607の造営に伴うSX4050の埋め立てや周辺一帯の造成時期を示すと考えられる。そして、このSD4260出土土器は、飛鳥Ⅰの新しい段階の特徴をもつ。

この時期の土器は、川原寺下層SD02→山田寺下層SD619および整地層→飛鳥池遺跡SD809灰緑色粘砂層→坂

田寺SG100（飛鳥Ⅱ）という変遷が示されている（『藤原概報22』）。SD4260出土土器は、土師器杯Cの径高指数、須恵器杯H・杯Gの口径から、山田寺下層SD619および整地層の様相に最も近いと考えることができる。土師器杯Cの外表面調整手法や他の器種の形態からみても矛盾はない。山田寺の造営時期は『上宮聖徳法王帝説』によると舒明13年（641）頃とされており、それに従えば、本土器群の時期も7世紀中葉を示すと考えられる。

SD4271およびSF2607敷葉層直下出土土器は、量は少ないが、遺構の重複関係からSD4260出土土器よりも、SF2607の造営により近い時期を示す資料である。

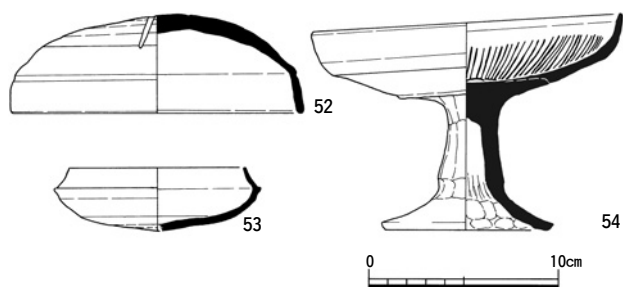


図123 SX4050・SF2607関連遺構出土の土器 1:4

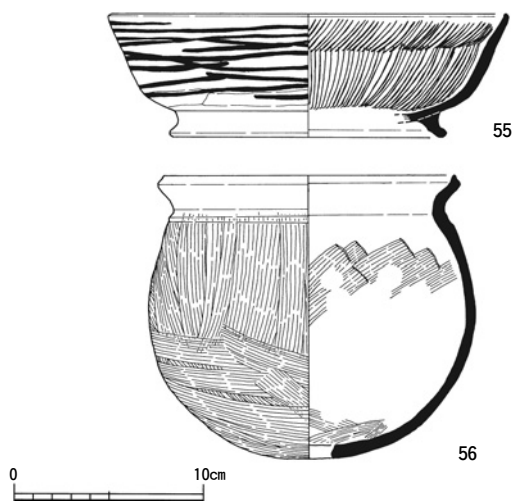


図124 その他遺構出土の土器 1:4

その他の土器 55は土師器杯B。東西溝SD4280・4285から出土した破片が接合した。飛鳥Ⅳ～Ⅴ。56は東西溝SD4280出土の土師器甕A。完形だが、底部に穿孔がある。体部は球形で、外面はナデ調整、内面は斜めハケの後ナデ調整をおこなう。口縁部は外反し、口縁端部外側に面をもつ。これは大和型の特徴を示す。飛鳥Ⅳ～Ⅴ。

(小田裕樹)

瓦 類

軒丸瓦2点、丸瓦182点(17.95kg)、平瓦542点(46.32kg)が出土した。斜行溝SD4271から出土した軒丸瓦は(図125)、「角端点珠」「奥山廃寺式」等と呼ばれる素弁八弁蓮華文軒丸瓦の蓮弁部分の破片。弁幅5cm。弁端の点珠は径6mm、間弁は紡錘形の先端部と軸線が離れる。外周と弁区の間には幅7mmの平坦面をもつが、平坦面に接する側面にナデ調整が認められることから、外縁のないことが分かる。瓦当裏面の先端に先端未加工の丸瓦を接合する。暗橙褐色で胎土は緻密、焼成は良好。

SD4271は、道路SF2607の盛土により覆われており、道路構築の上限を考える上での手がかりとなる。

(次山 淳)



図125 SD4271出土軒丸瓦 1:3

木製品・金属製品

木製品 加工木や木端とともに多量の木製品が出土している。現在整理中であり、以下に主な製品を報告する。

1は大型の五弦琴で、古墳時代後期の堰SX4262に転用されていた。底箱の側板は2片に割れているが、接合すれば長さ約116cm。天板も破損し、一部焦げる。弦を掛ける突起は5本に復元され、3本が折れている。天板と側板の結合には樹皮を用い、紐通し穴の隙間には小木片を差し込んで樹皮を固定する。2は不明品加工板。一方を多角形に加工し、もう一方を削って尖らせる。全長11.6cm。3は蓋の破片。直径約11.5cmに復元される小型品で、中央付近に2つの部材を合わせるための穴をあける。SD4280出土。4は檜扇の破片。13枚をとじ合わせ、要には細い木製棒を使用する。最も外側の1枚には「□一□□/□三□〔枚カ〕/□四枚」という3行分の墨書がある。残存長18.5cm。SD4289出土。5は曲物の盖板。3分の1程度を残すのみで、周縁には側板を取り付けるための穿孔が3箇所ある。SD4280出土。6は鳥形。完形品で、全長は17.6cm、最大幅2.2cm。全体に丁寧な削りを施す。SD4289出土。7は舟形の破片。船底には稜線が通り、断面はV字状を呈する。内面には成形時の剥抜き痕跡が明瞭に残る。残存長15.0cm、最大幅4.0cm、高さ2.0cm。8は手斧の柄の破片。枝を利用した握り部分の大半を欠き、挿入部の残存長は9.9cm。SD4090出土。9は蓋の破片。半分が残存し、直径約12cmに復元できる。中央に把手を取り付ける穴をあける。灰褐色土(遺物包含層)出土。10は杓子状製品。片側を欠き、全長12.0cmの小型品。SD4980出土。11は刀形破片。関は曲線的で、茎は4.9cmと短い。SD4980出土。12は篋状工具。細長い棒状で先端を薄く尖らせる。全長18.3cm。SD4980出土。

金属製品 13・14は鉄鏃。圭頭式の長頸鏃で片丸造り。13はいわゆる棘状関をもつ。全長16.0cm。SD4270出土。14も同形態であろう。15は長方形の銅板で、銅製人形の可能性もある。側縁には鑿で切断した痕跡が明瞭に残る。下端部を2つに切り、目と思われる表現もある。SD4280出土。16は銅製環珞の破片。中央で折れ曲がる。花卉形を呈し上端に穿孔を施す。鍍金等は認められない。SD1347A出土。その他、多量の鉄釘が出土している。

その他 SD4270から、タイマイと思われる小片が1点出土している。石神遺跡では初例である。(豊島直博)

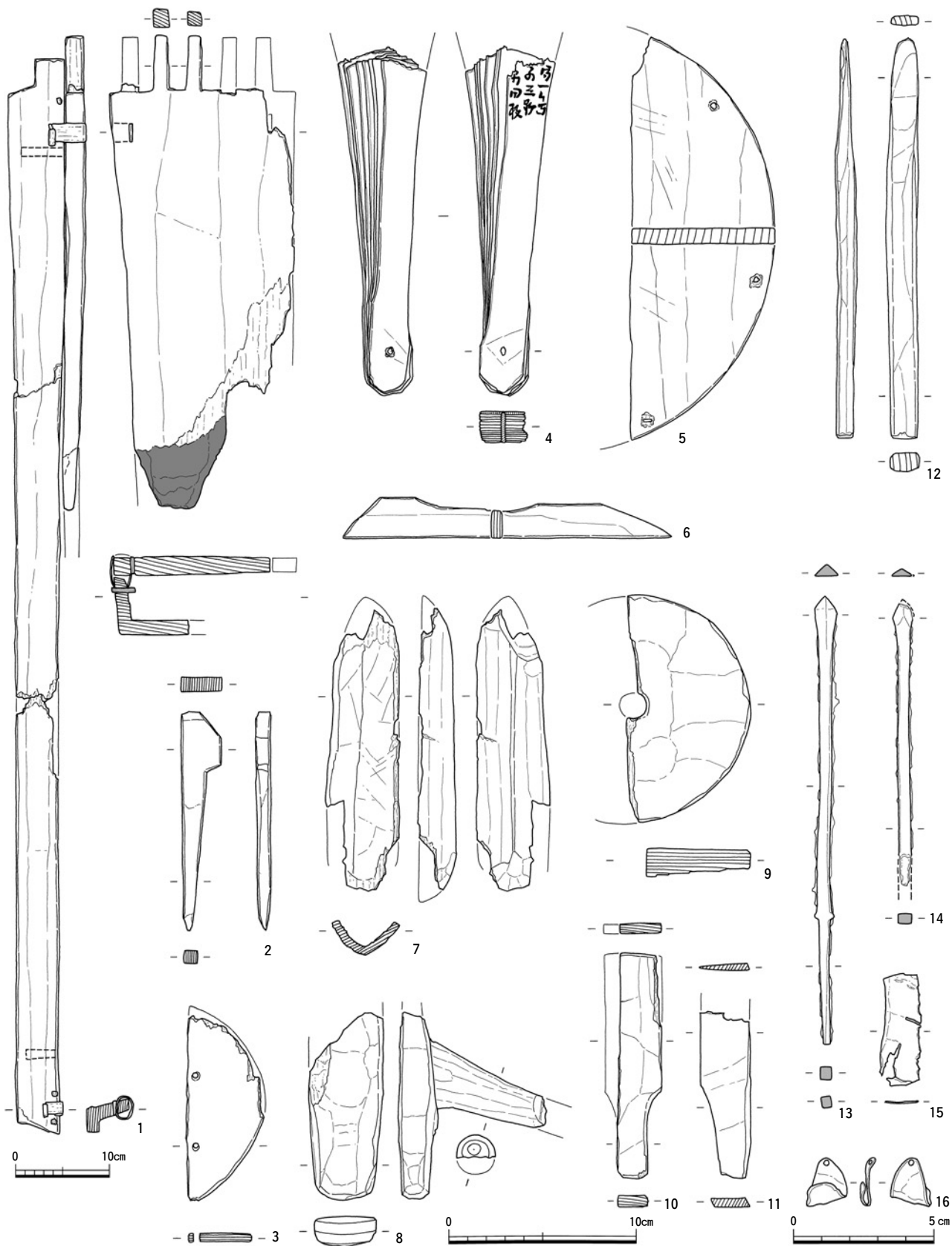


図126 第145次調査出土木製品・金属製品 (1は1:6 2~12は1:3 13~16は1:2)

石神遺跡第十九次調査出土木簡

SD四二六〇

1 □□女丁大人丁□取□久□
〔意カ〕〔御カ〕
(355)・21・6 081

2 大家臣…首大□
(57+31)・18・3 032

3 十五斤

〔思カ〕
□□□□□
112・24・4 032

4 〔4羽〕
□□天
(刻書)

・天天九 (右側面、刻書)
天大五
46・57・35 065

SF二六〇七

5 弥阿□□腰カ
108・34・5 032

6 天于
天王
229・86・12 065

SD四〇九〇

7 六人ア尼麻呂贊四古
138・21・5 031

8 〔一カ〕
□□□□□□□□□□□□□□□□
加ニア加女
(316)・25・4 019

9 〔刻書〕
□□□□□□□□□□□□□□□□
百代五十代
以蛭ア今女
□□□□□□□□□□□□□□□□
乙里田知不
石上大連公
(286)・(48)・5 081

10 □廿七人 沙弥六十
(115)・(48)・4 081

11 棕□棕□
〔棕カ〕
(63)・20・2 081

暗灰褐色粘質土

12 〔山カ〕
□□評佐加五十戸
・十市ア田ツ六斗俵
120・19・5 032

SD四二八〇

13 辛巳年□一連
〔鰻カ〕
□ア五十戸
125・32・3 032

14 □米二斗〇
(149)・43・3 019

SD四二八五とSD一三四七Bの合流点

15 田田塩二斗
118・23・7 031

SD四二八九

16 上長押釘卅隻 之中打合釘二
長七寸 五丈
〔□□□□〕 (削り残り)
248・36・3 032

17 村廣人 弟国
(124)・20・3 081

18 正月四日志紀末成
(148)・11・2 081

現代暗渠

19 小柱十九
150・37・4 081

木 簡

本簡は全部で32点 (うち削屑4点) 出土した。ここでは19点を報告する。斜行溝SD4260出土の1～4、山田道SF2607の造成盛土出土の5・6は、7世紀中葉頃に遡る可能性が高く、日本最古級の木簡である。V期の南北溝SD4289出土の16～18は一部8世紀の木簡を含む可能性もあるが、他は天武・持統朝を中心とした7世紀後半頃のものとみられる。

文書・記録簡 1は上下両端折れ。古拙を強くとどめた字体。「女丁」との対比から、「大人丁」は正丁を指そう。8文字目は2文字分の大きさであるが、全体で「意」とした。8は上下2片接続。上下両端折れ。表面の上半部と裏面は墨痕が極めて薄い。「加ニア」は三野国加爾評 (『飛鳥藤原京木簡1』193号) など地名に基づく部名か。9は3片接続。上下両端折れ、左右両辺割れ。上部は「五十代」など代制とみられる地積を墨書し、下部は歴名を刻書する。歴名には「以蛭ア」「乙里」という珍しいウジ名がみえる。「石上大連公」は下折れのため、「公」以下を名とみるか、尊称「公」のいずれかであろう。「大連」は藤原宮跡出土の木簡に事例があるが (奈良県教育委員会『藤原宮』48号)、八色の改姓以前の可能性がある「石上」は注目される。10は記録簡を二次的整形したもの。3片接続で、下端折れ、左辺割れ。「沙弥」との対応か

ら、上の欠損部は「僧」と推定される。読経や法会に参加する僧・沙弥の人数を書き上げたものであろう。第18次調査出土の僧や經典名の書かれた木簡 (『藤原木簡概報21』1・2号) と関係しよう。14は2片接続で、上端折れ。下部には穿孔がある。米支給に関わるとみられ、「二斗」は仕丁1人あたり10日分に相当する。17は上端折れ、下端二次的切断。「弟国」は「廣人」の出身地とみられ、後の山城国乙訓郡に該当しよう。1文字目は下部が「木」の字体で、「集」と釈読できれば、「物集村」の可能性もある。18は上端折れで、材の下部に日付と人名を記す。裏面はわずかな墨付きがあるのみ。 (竹本 晃)
貢進荷札 2は上下2片からなるが、中間を欠く。下片の下端は二次的削り。下片の4文字目はウ冠が確認でき、「家」の可能性もある。7は完形の賛荷札。賛の荷札は通常、税目・物品・数量以外は、貢進地名のみを記すが、本木簡では人名のみを記載する。賛と調の類似性を示すものとして注目される。12はほぼ完形の養米荷札。1文字目は「少」の可能性もある。2文字目は右側が「鳥」の字体。13は完形の鰻荷札。「辛巳年」は天武10年 (681)。物品・数量を記した後に地名を書くのは珍しい。ただし飛鳥池遺跡から、地名の前や途中で「次米」と書いた美濃国の荷札が出土している (『飛鳥藤原京木簡1』193・721号)。石神遺跡からも「汙和評仕俵/石野五十

戸」と書かれた荷札の可能性のある木簡が出土している（『藤原木簡概報18』104号）。15は完形荷札。「田田」は複数の候補地があるが、塩を貢進しているので、後の紀伊国名草郡多田郷にあたる可能性がある。なお、サト名の次に「五十戸」「里」を省略した事例は稀にある。

付札木簡 16は完形付札。裏面は削り残り。建築部材の上長押に用いる釘30本を進上する際に使用されたものである。地方からの貢進荷札ではない。7世紀後半頃、飛鳥池工房で大量の釘が生産されており、石神遺跡に供給された可能性もある。「五丈」は上長押の長さで、割書はそれを組み立てる際に使用する釘の種類や寸法などを注記する。3は完形の物品整理用の付札。表面が付札本来の記載で、重量を記す。類例に「十斤」とのみ記した坂田寺跡出土の7世紀中葉頃の付札（『藤原木簡概報17』385～387号）がある。裏面は二次的な墨書。5はほぼ完形。墨痕は極めて薄く、さらに検討を要する。

その他 4は3片接続。小型直方体の各辺を面取りした材に刻書する。6は大型材で、呪符の可能性もある。11は下端折れ、左辺割れの習書木簡。「椋」は7世紀に一般的なクラの表記。19は上端部の左寄りに径5mmの小孔があり、その下に墨書する。番付に関わるか。（市 大樹）

3 ま と め

阿倍山田道の検出

本調査で検出した道路SF2607は、調査区付近に位置が想定されていた阿倍山田道にあたる可能性が高い。

阿倍山田道の造営は、Ⅰ期の沼沢地SX4050、斜行溝SD4260の埋め立てと一連の工程でなされた。SD4260出土遺物などから、造営時期は7世紀中葉と考えられる。阿倍山田道は7世紀中葉に直線道路として本調査区の位置に造られ、藤原宮期まで道路の規模や側溝の位置を変えながらも、一貫してこの位置に存在していたことが判明した。この位置は藤原京条坊推定位置とはずれており、藤原京の条坊建設に際し、阿倍山田道は廃絶することなく、京域内に取り込まれたことが分かる。

なお、さらに古い時期の阿倍山田道の存否については、現県道下に未掘部分があり、慎重に考える必要がある。

Ⅳ期の阿倍山田道北側溝は、山田道第2・3次調査検出の東西溝SD2540にあたる。Ⅱ・Ⅲ期の北側溝は不明だが、SD2540がこの時期まで遡る可能性と、現県道下の

未掘部分にある可能性が考えられる。

なお、山田道第2次調査区の土層断面でも、植物層が観察されている。これは本調査区検出の敷葉層と同じレベルにあたり、盛土と考えられる土層も観察されている。これらのことから、敷葉工法を用いた道路盛土は山田道第2次調査区まで続き、SF2607は築造時から盛土基底部分が幅約20mの道路であったと判断できる。

石神遺跡北方の土地利用

第15～19次調査では石神遺跡中枢施設群北方の土地利用の解明を目的としてきたが、今回の調査で阿倍山田道を検出したことにより、石神遺跡中枢施設群と阿倍山田道との間における空間利用の一端が明らかになった。

以下、山田道第2・3次調査成果（『藤原概報21』）も踏まえながら、石神遺跡北方域における主要遺構の変遷について簡単にまとめてみる。

なお、第15～18次調査の概要では、中枢施設群との関係から遺構変遷をA～C期に大別しているが、ここでは阿倍山田道との関係をもとに、Ⅰ～Ⅴ期に分けて再整理をおこなう。

Ⅰ期 旧地形は調査区全体に谷が入り、沼沢地SX4050が広がる起伏のある地形であった。水は北～北西方向へと流れる。沼沢地の堆積は古墳時代中・後期にかけて進行しており、堰状施設SX4262もつくられた。

第18・19次調査区東側の微高地には方位が振れる斜行溝SD4260や石組列SX4235が設けられており、東方には何らかの施設が存在したとみられる。山田道第2次調査などで検出した7世紀代の方位の振れる掘立柱建物や溝なども、この時期の遺構となる可能性が高い。

Ⅱ期 沼沢地SX4050やSD4260は埋め立てられ、周辺一帯の整地がおこなわれる。SX4050埋め立ての際には、杭列で方形区画をつくり、土留めをおこなっている。山田道第2・3次調査で検出された石組暗渠SX2600・2601も、この整地に伴う可能性が高く、雷丘東側の広範囲にわたる大規模な造成であったと考えられる。

こうした整地をおこなった後、東西方向の直線道路である阿倍山田道の建設がなされた。道路は、敷葉工法を採り入れながら盛土により構築され、側溝として石組の東西溝SD4270を設けている。

また、道路南方では大溝SD4089・4090が掘削された。SD4089として東流し、SD4090となって北に約90m流れ

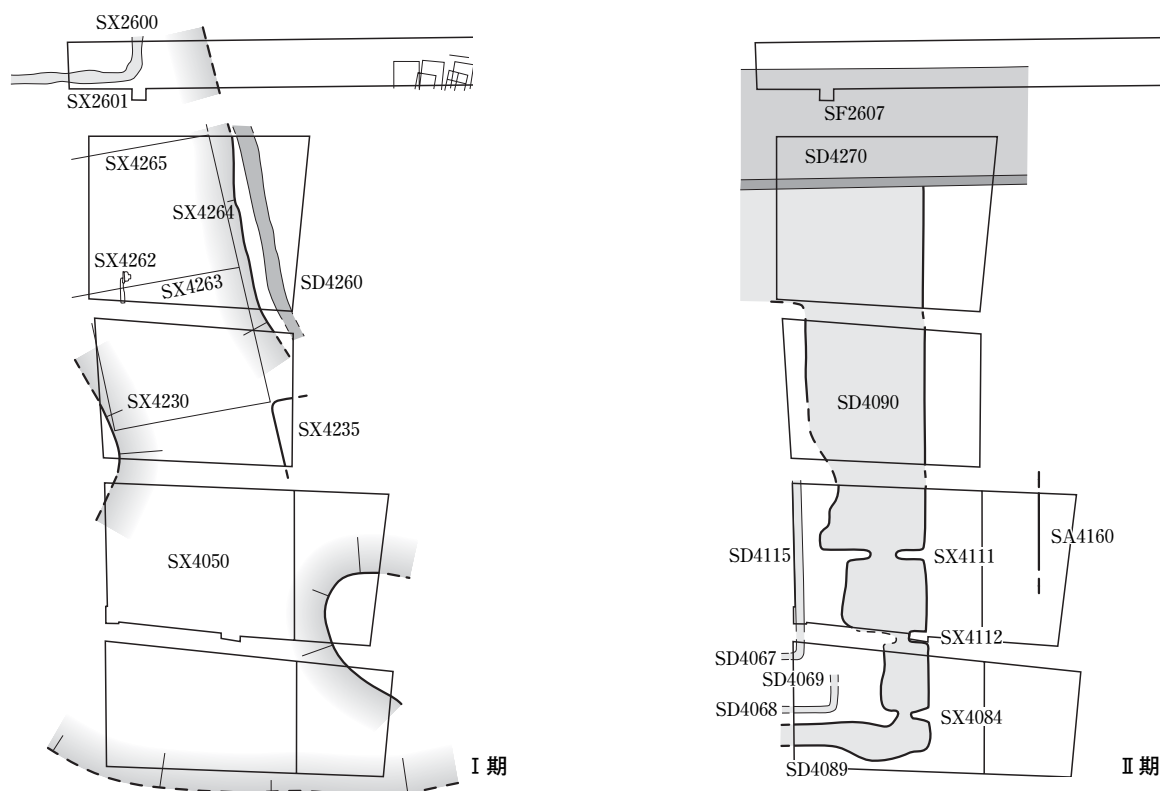


図127 遺構変遷図 (1)

た後、再度向きを変えて西流する大溝である。SD4090の東岸は直線的で、西岸は北に向かって徐々に広がっている。両岸にはSX4084などの土手状施設をつくり、水流を制御している。また、SD4089・4090より北西の位置にも、小規模な逆L字溝(SD4068・4069、SD4067・4115)が存在している。I期と異なり、正方位を指向するようになる。

Ⅲ期 大溝SD4089・4090を埋め立て、阿倍山田道南側溝もSD4270からSD4275に造り替え、道幅を広げたと考えられる。SD4089・4090の埋め立てに際しては、一時的な南北排水溝SD4121や、廃棄土坑とみられるSK4096・4097・4122などが設けられている。

この時期、石神遺跡中枢施設群から続く南北基幹排水路SD1347Aが掘削され、阿倍山田道南側溝SD4275に向かって流れた。第15次調査では、掘立柱建物SB4070・石組井戸SE4080・石敷SX4081が併存していたことが明らかになっており、西側に広がる何らかの施設が存在していたと考えられる。

なお、SD1347を西側溝とする、南北道路SF4100が想定されているが、第17次調査で東側溝が検出されていないこと、第19次調査で道路に関わる痕跡が確認できなかったことから、道路の存在は不確実である。ただし、両側溝こそ伴わないものの、石神遺跡を通り飛鳥寺西北隅に至る通路の役割を果たしていた可能性はある。

Ⅳ期 阿倍山田道南側溝SD4275をSD4280・4285に、SD1347AをSD1347Bに造り替える。SD4280とSD4285の掘

削の先後関係は不明であるが、最終的には併存していた。SD1347Bに伴う遺構として、石敷SX4098が検出されているが、全体的にこの時期の遺構は希薄である。ただし、Ⅲ期としたSB4070・SE4080・SX4081がⅣ期の遺構である可能性も残る。なお、第15次調査区内のSD4089・4090に重複する位置に、逆L字の浅い溝SD4094・4095があるが、軟弱な低位部に自然に形成された溝または一時的な排水溝とみられる。

Ⅴ期 SD4280・4285やSD1347Bが灰色粗砂によって自然埋没した後、南北溝SD4289が阿倍山田道を横切るように掘削されており、この時期になると道路の機能が低下したと考えられる。当該期にはSD1347Bを覆う石敷があるが、建物などの遺構は希薄である。また、この石敷より上層では、素掘小溝や礫集中部が検出されるにとどまり、Ⅴ期よりも新しい時代になると基本的に農地化していたと考えられる。

各期の年代と対応関係 以上、遺構の重複関係をもとに変遷状況を整理したが、次に出土遺物をもとに各時期の年代についてみる。

まず、Ⅱ期の開始時期はSD4260出土土器より7世紀中葉に押さえることができ、Ⅰ期はそれ以前となる。Ⅱ期における阿倍山田道の造営とともに掘削されたSD4089は、天武7年(678)の木簡を出土したSK4064(『紀要2003』)との重複関係が問題となるが、SD4089が掘り直されたことによるものと解釈しておく。

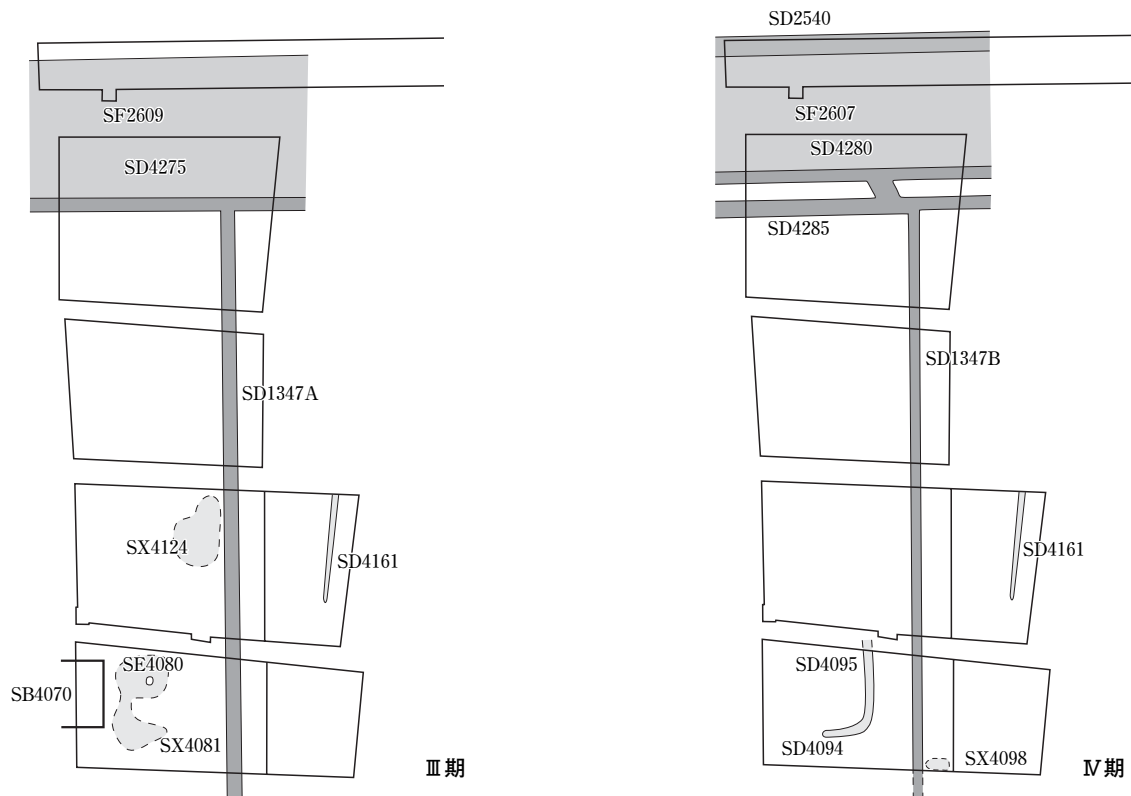


図128 遺構変遷図 (2)

つぎにⅢ期の開始時期について、Ⅲ期の造成に伴うSD4089・4090の埋め立て土や、廃棄土坑、一時的な排水溝・整地土から大量の遺物が出土している。特に、紀年銘木簡をみると、天智4年(665)の1点を除けば、天武7年(678)～持統6年(692)の範囲に分布しており、基本的に天武・持統朝のものであることが分かる。SD4089・4090からは飛鳥Ⅳを主体とする土器が出土しており、こうした木簡の年代観とも概ね合致する。

ところが、Ⅲ期の造成後に掘削されたSD1347Aからは、天武4年(675)、同7～10年、朱鳥元年(686)の紀年銘木簡が出土しており、持統朝の木簡は含まれておらず、遺構変遷と木簡の様相が対応していない。SD1347A出土木簡のサト表記をみても、天武朝以前に一般的な「五十戸」表記が大半を占めており、天武末年・持統朝以降に使用された「里」表記は1点にとどまる。

このように、Ⅲ期の造成土や遺構から出土する遺物や木簡からはⅢ期の年代が7世紀後半頃に中心があることまでは分かるが、その年代を細かく絞り込むことは難しい。Ⅲ期の開始時期については、石神遺跡中枢施設群B・C期の年代とも関わって、石神遺跡の評価をおこなう上で重要な問題となる。今後、木簡の出土状況や遺物の年代観を含めてさらに慎重に検討する必要がある。

Ⅳ期はSD4280・4285出土土器が飛鳥Ⅴを主体としており、藤原宮期である。Ⅴ期は奈良時代以降と考える。

最後に、上記Ⅰ～Ⅴ期の変遷を、中枢施設群のA～C

期の時期区分にあえて対応させてみると、SD1347が機能するⅢ・Ⅳ期がC期にあたるので、それ以前がA・B期となる。これまでSD4089・4090はB期の遺構と考えていたが、本調査の成果からはSD4090の造営時期は阿倍山田道の建設と同時の7世紀中葉に求められ、少なくともA期の途中からSD4089・4090が存在していたと判断される。よってⅡ期はA・B期にまたがる時期にあたると思われる。ただし、前述のように、SD4089とSK4064との重複関係の問題点は残されている。中枢施設群の詳細な遺構変遷との対応関係や各時期の時間幅や実年代について、今後の検討が必要である。

第15～19次調査の結果、石神遺跡北方では、多数の建物が計画的に配置される中枢施設群とは異なって、溝以外の遺構は少なく、土地利用はあまり活発ではなかったことが明らかになった。これは、もともとこの場所が沼沢地であり、建物の建設に適さなかったためと考えられる。しかし、2度にわたる大規模な造成工事や複数回に及ぶ溝の付け替えがおこなわれ、空間利用が大きく変化している点は重要である。これは、中枢施設群と一体の計画的な空間配置の中に、石神遺跡北方域が位置づけられていたことを示す。また、大量の木簡などの出土遺物からは、官衙や皇族・貴族の邸宅地など周辺にさらなる施設群が存在していたことも予想される。今後も一帯の調査を継続し、当地域の性格を明らかにしていく必要がある。

(小田)

第20次調査

石神遺跡第20次調査の主目的は、第13・14次調査でA期（斉明朝頃）の饗宴施設となる建物群北限と考えた、東西掘立柱塀SA3895と大規模な東西石組溝SD3896を中心とする区画施設が、東に向かってどのような様相を呈していたかを解明することである。あわせて、石神遺跡建物群の東限と、遺跡外郭施設の存否を明らかにして、遺跡の範囲を確認することを目的としている。調査区は第14次調査区と第17次調査区南区の東隣に設け、既存の畦畔を保護する必要から東西2つに分けた。これを便宜上、東区・西区と呼称する。発掘調査面積は計約484㎡。調査期間は2007年10月1日～2008年2月14日である。

基本層序は、水田耕作土（東区12cm、西区10cm）、床土（東区18cm、西区23cm）、各時期の整地土（橙斑灰褐色土・暗赤斑褐色土・橙斑褐色土・橙斑灰色土・茶斑灰色土）、自然堆積土（礫混褐色砂・青緑色細砂）である。地形は北西へ下る傾斜面で、検出した溝の遺構も北、西へ下る勾配をもつ。

1 検出遺構

石神遺跡の時期区分は、A・B・C期を基本とするが、調査の進展につれ、A期は3期に細分され、第14次調査ではA3期はさらに3時期に分けられている（A1期、A2期、A3-1期、A3-2期、A3-3期）。今回の調査では、検出した遺構が従来の時期区分のうち、A期の細分およびB・C期の区別が困難であったため、ここではA期以前、A期、B期以降に分けて記述する。

A期以前

斜行石組暗渠・斜行石組溝・斜行掘立柱塀・東西掘立柱塀がこの時期にあたる。

東西石組暗渠SD4309 西区西北隅に位置する東西方向の石組暗渠。幅35cm、長さ4m分を検出した。方位は西でやや北に振れているが、これは等高線にほぼ直交している。東から西に水が流れる。径20cm程度の細長い石を側石として、これに架けて暗渠の方向に直交して並べられた径40cm大の石を蓋石とする。暗渠内部には青灰色砂が堆積しているものの、周囲にも類似した砂が広がり、明確な掘形は不明である。

東西石組暗渠SD4310 西区西南部に位置する東西方向の石組暗渠。幅30cm、長さ9.5m分を検出した。方向はやや

蛇行しながら東から西に流れる。これは等高線にほぼ直交している。底には小礫を敷き、両側に3段の側石を積み上げ、拳大の石で高さを調整してから蓋石を架け渡す。側石は下段と上段が径20～40cm大で、長手を暗渠の方向にして据えてあり、中段は径15cm前後の比較的小さな石を小口積み風に据えてある。暗渠の据付掘形は幅2.5m、埋土は灰色粘質土である。暗渠内には粗砂が詰まっていた。暗渠東端では据付掘形が不明瞭で、周囲にも砂が広がる。また、東端にはSA4305が位置する。

南北石組暗渠SD4308 西区北端に位置する南北方向の石組で、幅35cm、南北1.4m分を検出した。方位は北でやや西に振れており、地形的に南から北に水が流れる。径20cm大の石を側石として、これに挟まれる径45cm大の石が蓋石と見られ、SD4309・SD4310と類似した並べ方であるため、石組暗渠と判断した。ただし、暗渠としての構造は壊された状態で遺存したものである。

南北石組溝SD4307 西区中央に位置する南北石組溝。幅20cm、深さは側石が最下段のみの残存であることから不明。底石は人頭大の扁平な石を敷き並べている。方向は北でやや東に振れるため斜行しているが、SA4304を北に越えたところで西へカーブして、A期のSD332に壊されている。SD4308につながるようにも見えるが、石組の構造が異なる。

南北塀SA4305 西区中央に位置する南北塀。方向は北でやや東に振れ、SD4307と並行していると見られる。調査区南端から中央付近まで5間分を検出したが、SA3895と重複する箇所は柱穴が不明瞭である。柱間寸法は南3間が1.6～1.7mで、北2間が2.2mである。

東西塀SA4304 西区中央に位置する東西塀である。柱間1.9mで2間分を検出した。西端はSA4305の北端の柱穴になり、一体で囲障施設の西北隅部分を形成する。また、この西端の柱穴掘形はA期のSD332の掘形に一部壊されている。

A 期

基幹水路となる南北石組溝や南北棟建物を築造し、その後東西方向の石組溝や塀が付設される。

南北溝SD4295 東区西端でSB4300の東側に位置する南北方向の素掘溝である。幅30cm、深さ15cm。SB4300の東側柱から1.3mに位置するため、雨落溝の可能性もあるが、西側に同様の溝は確認していない。また、層位から

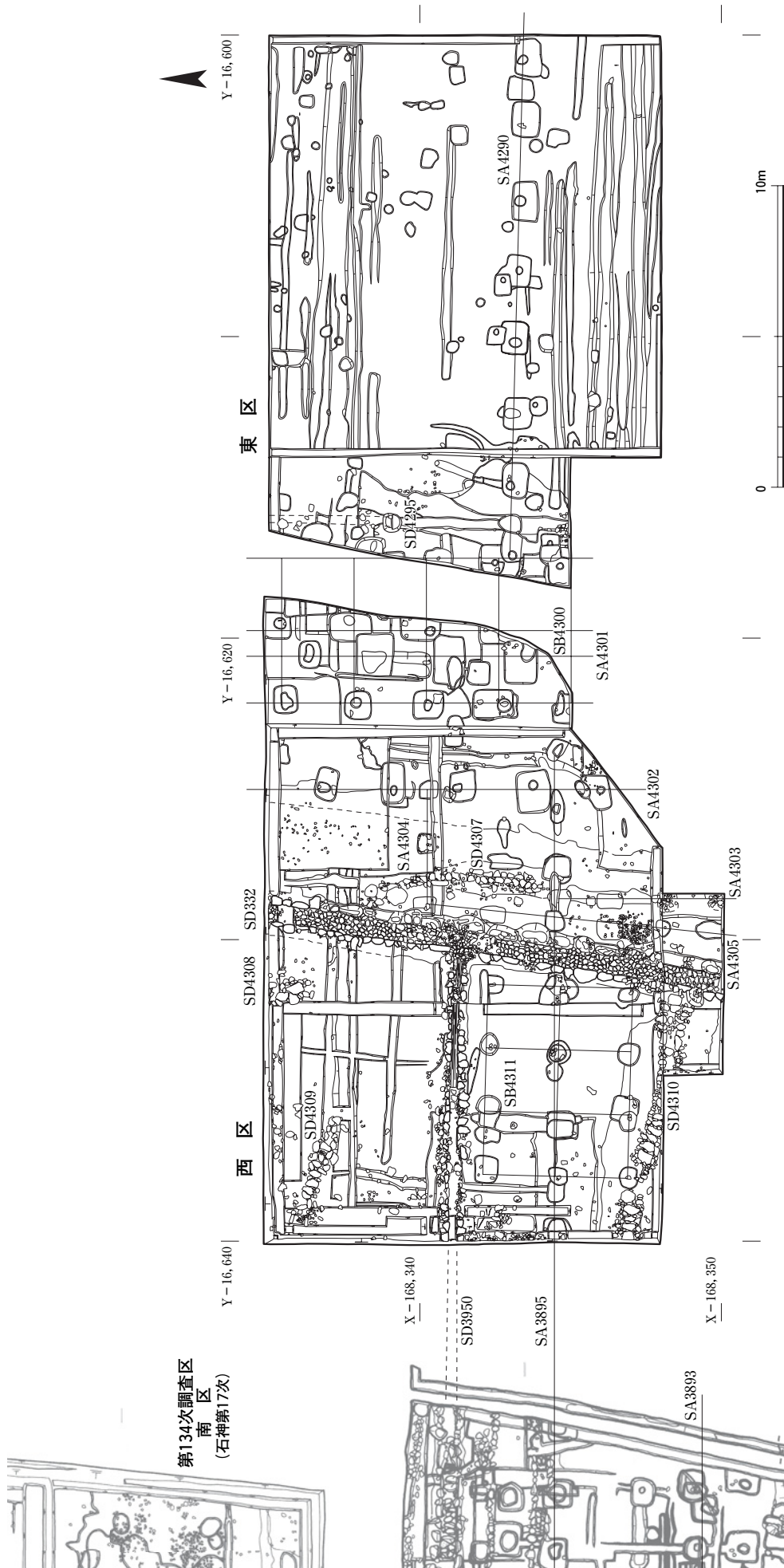


図129 第150次調査 (石神第20次) 調査遺構図 1 : 200

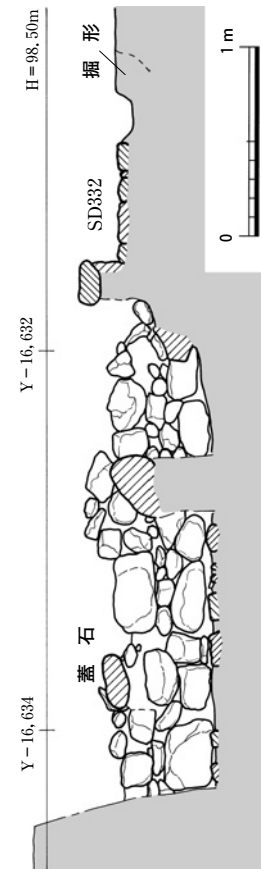


図130 SD4310断面図 1 : 40

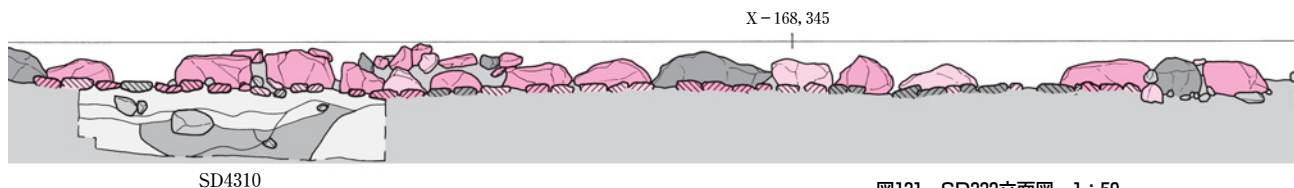


図131 SD332立面図 1:50

SB4300と同時期か先行すると考えられる。

掘立柱建物SB4300 西区と東区にかかる梁行2間の南北棟総柱建物。桁行4間分を検出し、調査区外南北へ続く可能性もある。柱間寸法は梁行・桁行ともに2.4m等間である。柱掘形は棟通りで長辺が1.3m、側通りで長辺が1.0m前後と大きさを変えている。検出面からの深さは最大80cmで、他の遺構の柱穴に比べて著しく深い。

南北石組溝SD332 西区中央を縦貫する南北石組溝で、方向は北でやや東に振れる。幅60cm、深さ35cm。側石は最大で径80cm大の楕円形の石を用い、北端では立て並べられるが、全体としては長軸を溝と平行に並べ、溝の内面を平らに整えている。底石には径20cm大の扁平な川原石を敷く。石材を調査した結果、閃緑岩や花崗岩を使用していることが判明した。東の側石は北から4石を除いて抜き取られ、SD3950との接続箇所では底石に乱れが見られる。据付掘形は幅1.8m。検出した15mの北端と南端では22cmの高低差があり、水は北流する。南端ではSD4310を壊して造られており、これに伴ってこの部分は比較的急勾配で若干盛り上がり、底石もわずかに大きい。このSD332は第1次調査区南端の南北石組溝SD330から繋がる石組溝で、総延長200mを確認したことになる。第1次調査ではA期に属すると考え、その後の調査でB期に属すると見解を変えたが、第14次調査でA3期と判断したSD3950が支線水路として接続することや、今回の出土土器からみて、A期を通じて利用された水路と判断できる。

東西石組溝SD3950 第14次調査で検出されており、本調査区西端からSD332に接続するA3期の東西石組溝。勾配から見て、SD332から分岐した水を西に流す。溝内には粗砂が堆積している。東半には溝底に木樋を据えてある。木樋は長さ4.3mで、コウヤマキの半割丸太を削り抜いたものである。溝幅は溝東端から木樋西端まで20cm、木樋西端から調査区西端まで30cmで、段階的に広がる構造をしている。深さは均一で20cm。底石は木樋西端部分に3石を確認できたが、その他は遺存していない。側石は人頭大のものを1段で用い、東半では木樋の上に迫り出す小口積みにして、西半では立て並べる。

東西堀SA3895 第13・14次調査区から続く東西堀。当調査区への延長分はA3-3期とされる。今回は西区西端か

らSB4300の西側まで8間分を検出した。西から5間目でSD332を越える。柱間寸法は西3間と東3間が1.8m等間。その間の2間分は柱間寸法が広くなる。従来の調査では、東西堀の柱間寸法は2.1m等間としてきた。しかし厳密にみると、第14次調査区を南北に流れるSD900の西側13間分では2.05m等間であるのに対し、その東側では1.8m等間3間分を所々に配置しながら、その他の柱間は寸法が乱れたものとなっている。したがって、SD900を境にして東西で堀の性格が異なり、これを時期差や構造差とみることも可能である。

南北堀SA4303 西区南端からSA3895に接続する南北堀である。柱間は1.8m。SD4307の石組を壊して埋め立てた後に、柱穴を掘り込んでいる。掘形および採取埋土には拳大の石を多く含む。

B期以降

南北方向の堀や東西方向の堀が造られ、小規模な建物の造営もおこなわれる。

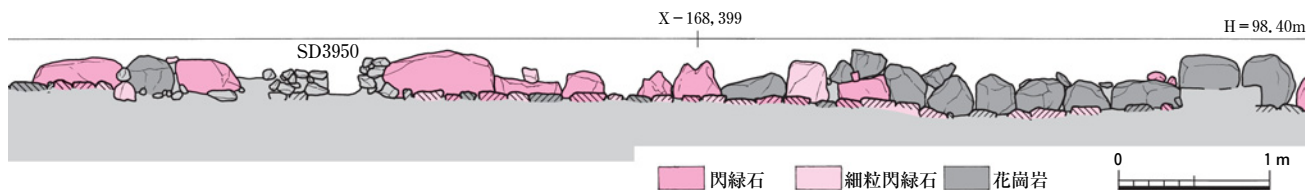
掘立柱建物SB4311 西区南西部に位置する桁行3間、梁行2間の東西棟建物。柱間寸法は桁行2.1m、梁行2.4mで梁行の方が広い。建物棟通り柱穴の南北位置はA期のSA3895と重複し、前後関係は明らかであるが、埋土に明確な違いがない。そのため、棟通り西から2番目の柱穴がSA3895と重なっているのであれば、この建物は総柱建物となる。西南隅の柱掘形はA期以前のSD4310を壊している。

南北堀SA4302 西区東部を縦貫する南北堀。調査区北壁でも柱穴の一部を確認できたため、5間以上となる。柱間寸法は2.3m等間。柱掘形は東西1.3mを長手とする長方形であり、深さは20cmが残る。

南北堀SA4301 西区東端を縦貫する南北堀で、3間分を検出した。柱間寸法は2.4m等間。柱掘形は東西1.4mを長手とする長方形であり、深さは40cmが残る。

東西堀SA4290 東区中央を横断する東西堀で、7間分を検出した。柱間寸法は2.35m等間で、柱掘形は東西1.2mを長手とする長方形である。東で南に約1°振れるが、従来の調査でこの特徴はB期までに多い。なお、SA4290の南北で広く遺構面を掘り下げて精査したが、関連する遺構は確認されず、縄文土器などが出土するにとどまる。

(黒坂貴裕)



2 出土遺物

土器 整理箱40箱分の土器が出土した。7世紀代の須恵器と土師器類が大部分を占め、この中にはロクロ土師器・漆付土器もある。また、縄文土器・弥生土器なども出土した。漆付土器は、運搬具・貯蔵具として用いられた壺・甕の内面に漆が付着するものが多い。縄文土器はその多くが底部片であり、厳密な時期の特定は困難であるが、中期末～後期初、後期後半、晩期後半～弥生前期のものがある。弥生土器も底部片であるため、厳密な時期特定は難しい。これらは現在整理中である。

7世紀代の須恵器と土師器については、柱穴から時期決定に結びつく資料が出土しなかったため、SD332 (2～4)、SD3950 (6)、整地土である暗赤斑褐色土 (5)、橙斑褐色土 (1・7)、橙斑灰褐色土 (8・10)、橙斑灰色土出土 (9・11) のものについてその概要を述べる (図132)。

須恵器杯G蓋は、頂部がやや扁平なつまみをもつもの

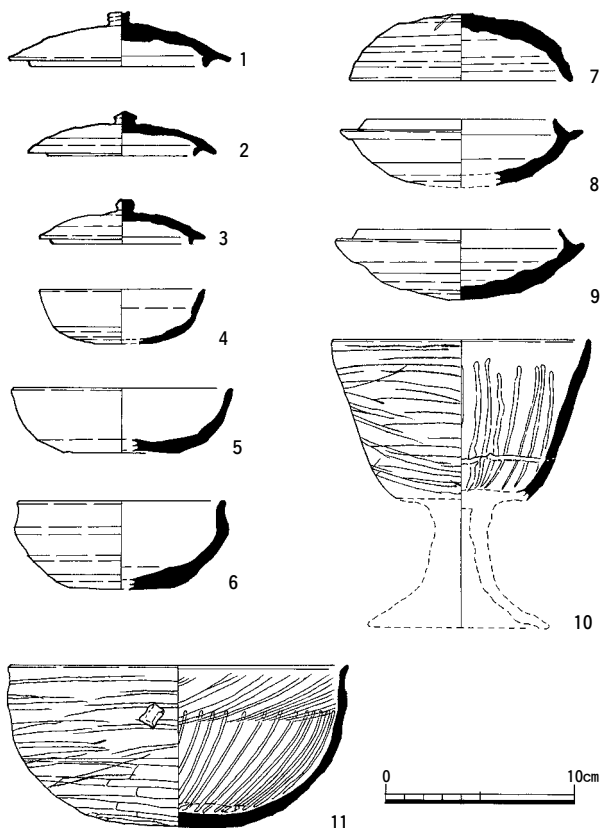


図132 第150次調査出土土器 1:4

(1・3) と、宝珠形のつまみをもつもの (2) がある。口径 (身の接地径) 7.8～10.2cm、器高2.3～2.9cmである。須恵器杯Gは底部にロクロケズリを施すもの (4) と、施さないもの (5) がある。復元口径8.7～11.7cm、復元高2.9～3.4cmである。6は須恵器杯で、内外面に灰がかかる。復元口径10.8cm、復元高4.7cmで灰白色を呈する。7は須恵器杯H蓋で、強いロクロナデが施される。口径11.7cm、器高3.5cmで灰白色を呈する。須恵器杯Hは底部にロクロケズリが施される。復元口径 (蓋の接地径) 11.4～12.2cm、復元高3.6～3.8cmである (8・9)。10は土師器脚付鉢である。内面には太い暗文が放射状に入る。復元口径は13.6cm、復元高は10.3cmで、石神遺跡SE800出土資料 (第4次調査) に類例がある。橙褐色を呈する。11は土師器杯C Iである。内面に下段が太い二段放射暗文、見込み部に螺旋文がわずかに残る。復元口径17.8cm、復元高8.6cmで橙褐色を呈する。

これらの土器は、須恵器杯蓋・杯身の口径などから、橙斑灰色土出土資料が、飛鳥 I の中でも後半の山田寺下層SD619や甘樫丘東麓遺跡焼土層SX037出土の土器群に近似する。また、SD332・SD3950・暗赤斑褐色土・橙斑褐色土・橙斑灰褐色土から出土した資料は、飛鳥 I の後半から飛鳥 II にかけてのもので、7世紀中ごろの所産と考えられる。

瓦・金属製品 瓦類は、平瓦が252点 (14.9kg)、丸瓦が46点 (2.6kg) 出土した。金属製品ではSD4310から鉄製鋤先が1点出土し、包含層から和同開珎1点、中国北宋の元符通宝1点が出土した。

(関広尚世)

3 遺構変遷と配置計画

本調査区の遺構について、関連する既調査区の成果も踏まえながら整理をおこない、あわせてA期を中心とした配置計画について言及する。

A期以前 石組の溝や暗渠が遺構の多数を占め、正方位にのらない配置がおこなわれる。過去の調査でも等高線にほぼ直交するとされる遺構が見つかり、本調査区の石組暗渠SD4308・4309・4310も等高線を意識した土地利用であると考えられる。

さらに今回は掘立柱塀SA4304・4305と、これに伴う石組溝SD4307を検出している。塀と石組溝の配置から、

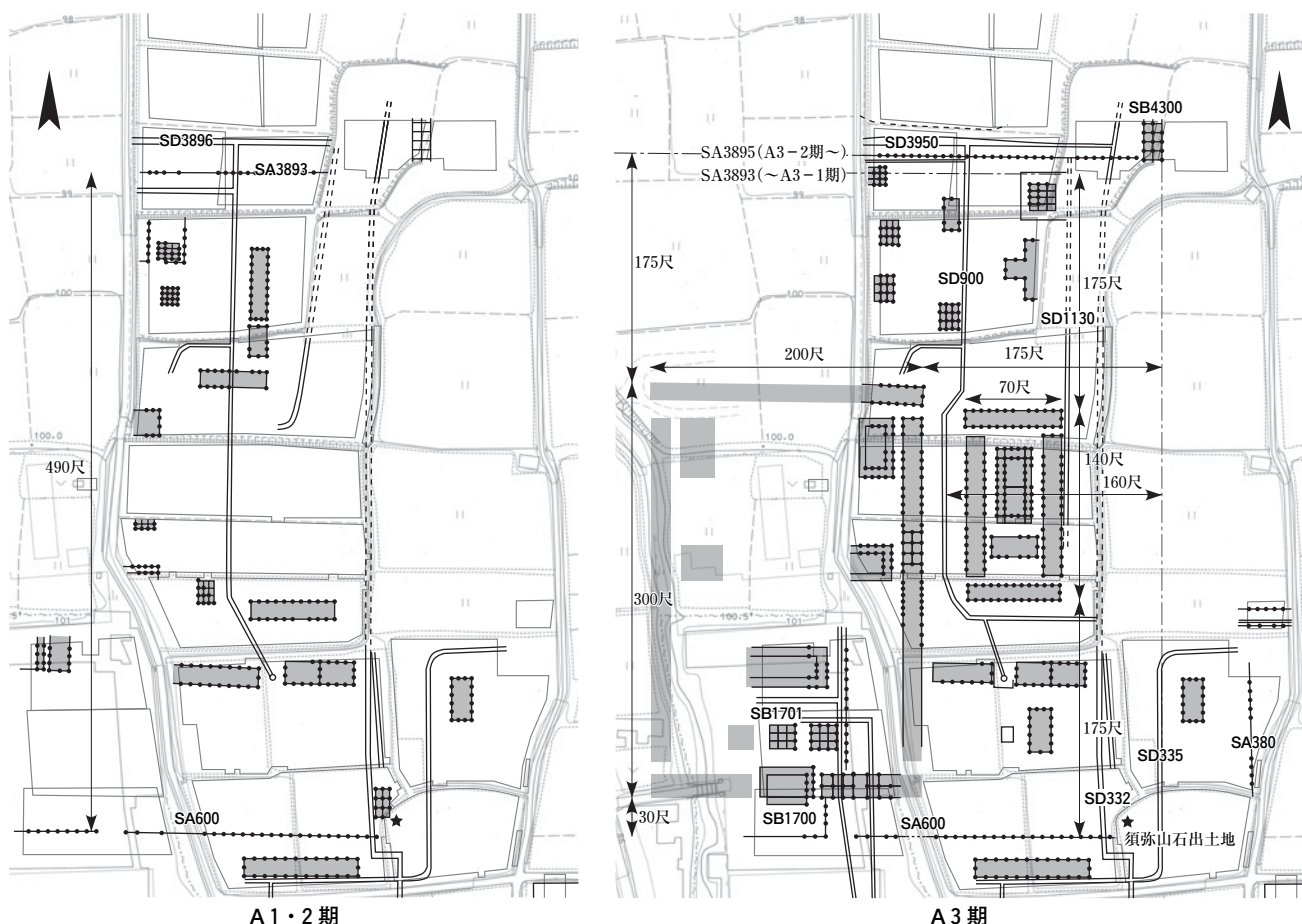


図133 石神遺跡中心部の施設配置（A期） 1：2000

囲繞された区画の西北隅を形成していると理解でき、既調査区東側において何らかの土地利用をしていた可能性が高まったといえよう。

A 期 A1・2期に石神遺跡建物群の北限となる東西基幹排水路SD3896は、第13・14次調査で検出され、その東延長部が本調査区に想定されたが、確認されなかった。同様に、東西支線水路とみられるA3-2期のSD3951についても、本調査区では確認されなかった。この2条の水路が本調査区に続いていないことを確認した結果、第14次調査区と本調査区との間から水路が始まるか、あるいは水路の東端が接続する南北方向の水路の存在が想定される。前者の場合、水は西に流れるので問題はない。後者の場合は、第8次調査で検出された南北石組溝SD1354（A1期）・SD1130（A3期）が候補としてあげられ、その延長を本調査区の西側に想定することが可能である。ただし、SD3896がA1・2期に機能しているため、対応関係とその時期について再考を要する。

また、A2期からA3-1期における、石神遺跡の北限となる東西堀SA3893も、その延長位置が本調査区南端に想定されたが、続かないことを確認した。この堀の東端も本調査区の西側に想定される。

以上のように、本調査区では石神遺跡建物群の北限施設となる東西方向の遺構の中で、A1・2期の遺構は確

認できず、A3期のSD3950とSA3895だけが確認できた。そのため、本調査区が建物群に取り込まれるのはA3期と考えられる。

また、SD3950はSD332に接続し、SA3895はSB4300に取り付く形で止まるものの、SD332とSB4300は北限施設と接続しつつ、なお北に続く。このことにより、SD332は最盛期の建物群が形成される前段階から石神遺跡を縦貫する基幹水路であり、SB4300は東を区切る一つの区画的な建物といえる。さらに、①SB4300の東側にA期の遺構を確認できない。②建物規模南北4間以上で、柱穴掘形の深さや形状からみて大規模な倉庫建物か、建物群中心区画にみられるような長廊状建物が想定できる。③SB4300東側柱は第1・2次調査で検出した大規模な南北石組溝SD335と東西位置がほぼ一致する。これらのことから、SB4300は石神遺跡建物群東限の有力な候補となり得るものである。

一方、第2次調査では調査区東端に南北堀SA380を検出しており、これも石神遺跡建物群東限の候補であるが、本調査区外東側に東西位置が想定されるため、今回は明らかにできていない。

石神遺跡建物群の北限が確定した第13次調査では、南限となる東西堀SA600から、北限となる東西堀SA3893・3895までの水平距離について、ともに大宝令大尺の500

尺、小尺の600尺に近い数値を示すとしている。また第8次調査では、石神遺跡の最盛期（A3期）に形成される2つの口字状中心区画のうち、東中心区画の外周の大きさが大尺（以下すべて大尺）で東西70尺×南北140尺に相当することが明らかとなっており、さらに南限SA600から東中心区画南辺までを175尺、つまり70尺の2.5倍に相当するとして、35尺を基本単位とする配置計画があったと推定している。以上を踏まえて、東中心区画北辺から北限SA3893までの水平距離を測ると、62.85mで175尺に近い数値を示すことがわかる。これにより東中心区画の南側と北側で等距離を隔てて東西塀が配置され、南北規模を490尺とみる事が可能である。

西中心区画については、基本単位35尺に則っていないことが既に指摘されているが、南限SA600から西中心区画南辺までの水平距離が10.7m、西中心区画の南辺から北辺まで108mとなり、それぞれ30尺と300尺に近い数値を示す。これにより、区画の北辺から北限SA3893までは56.3mで160尺、SA3895までは61.1mで175尺に近い数値を示すことになる。

石神遺跡の東西規模については、西中心区画の西半が未調査であるため推定の域を出ないが、西中心区画のSB1700・1701が区画東西中軸線上にあるとみる事が可能であるため、区画東側を形成するSB820を西側へ折り返すことで、西中心区画東西規模を推定することができる。SB1700とSB1701の中軸線の東西位置が僅かにずれているため、前者を基準にすると69.6m、後者を基準にすると73.3mとなるが、いずれの場合でも東西規模は200尺に近い数値を示すと想定できる。

ここまで、既調査区の配置計画をみてきたが、これをもとに、今回の調査区で検出した石神遺跡東限の候補となる掘立柱建物SB4300の位置を測ると、東側柱が西中心区画推定西辺（SB1700を中軸として）から132.3mで、375尺に近い数値となる。これは西中心区画東辺から175尺で、東西中心区画間を流れるSD890から160尺となる。ただし、東西規模では基本単位を見いだせないのが、基準となる遺構を検討する必要がある。

B期以降 今回の調査区中央付近で南北方向の掘立柱塀を2条検出した（SA4301・4302）。この2条の塀は柱間寸法が異なり、併存するとは考えにくいことから、時期を違えてこの付近で東西を区画していたことがわかる。南

北塀の西側には建物SB4311があり、東側では東西塀SA4290が位置することから、東西で土地利用が異なった可能性がある。また、このSA4290は東側への遺跡の展開を示し、第1・2次調査で確認された、周囲に石敷を伴う南北棟建物SB400とその南を区画するSA560の北方に位置する。そのため、SA4290も遺跡の北限を示す施設となる可能性がある。

4 ま と め

以上の成果から、今回の調査では石神遺跡建物群北限施設の性格と、遺跡東限に関わる施設配置の様相について新たな知見を得ることができた。

従来、石神遺跡最盛期であるA期には、遺跡内を流れる南北溝がT字を形成するように建物群北限の東西溝にすべて流れ込んでいたため、その北側に東西方向の通路的な空間が想定されてきた。しかし、今回の調査区では建物群北限を越えて北に流れる基幹水路SD332、同じく北へ続く南北棟建物SB4300を検出した。これによって第15～19次調査で明らかになった石神遺跡西北部の建物が稀薄な谷地形の区域を取り囲むように、施設が配置されていた可能性が出てきた。加えて、SB4300とSD335がほぼ南北同一線上にのることで石神遺跡東限の有力な候補を得ることができた。

また、A期以前は、これまでの調査で建物や石組溝を検出するなど土地利用の一端を確認している。今回も石組暗渠や石組溝を検出し、加えて何らかを圍繞する掘立柱塀を確認したことにより、土地利用が今回までの調査区東側にも広がっていたものと推定できる。

B期以降は、小規模な建物もみられるが、掘立柱塀はいずれも柱穴掘形が大きく、柱間寸法も整然としている。これによって計画的で大規模な土地利用があったとする従来の見解を補強するとともに、東西掘立柱塀SA4290を検出したことによって、東側へ遺構が展開する可能性がでてきた。

今後は第一にSB4300の全容と性格を明らかにすることが重要な課題であり、それによって石神遺跡建物群東限の様相が明らかになると期待される。また、東西規模の推定も試みたが、東西規模を測る基準が溝や建物側柱でよいのかなどに加え、特に西限区画施設を確定させることが将来的な課題といえる。

（黒坂）